

## 高校のリテラシー補習クラスにおける読書と自己評価の関係

*Katherine Frankel*  
*Boston University*

読書力の上達を目指したクラスに青年期の若者を在籍させるのは珍しいことではない。往年のリテラシー補習クラスに関する研究は、生徒の読書能力や方法の習得に焦点を置いたものが多く、生徒の読書に関する自己評価・意識（アイデンティティ）がリテラシー習得にいかに関与しているかについて考察したものはごくわずかである。この差を言及するに当たり、著者は位置づけと自己評価・意識の理論を用い、次の設問に答えた：学生のリテラシーへの理解と読書に関する自己評価は、リテラシー補習クラスの雰囲気とどのように影響し合っているか。著者は生徒の主体性に焦点を置いた別々のクラスで、2名の学生と教師から採取したインタビュー、観測手記、人為現象を分析した。学生の優秀な読者であるという自己意識はクラスの雰囲気と対立し、各々が異なる反応を示した、という分析結果が明らかになった。一人の学生は教師の期待に反しクラスの雰囲気に逆らい、読書が苦手であるという自己の位置づけを打破することは出来なかった。他の生徒は、有能な読者であると教師が評価したクラスの雰囲気に従い、最終的にリーディングは苦手であるという自己の位置づけを覆した。この研究結果は、生徒の読者としての自己認識と教師の補習クラスにおけるリテラシーと習学に対する理解が生徒の主体性と教師のそれに対する評価に影響していることを明らかにした。更に、生徒を低学力と位置づけされるクラスに入れる習慣の問題点も明らかにした。学術的、社会的、個人的に生徒一人一人に沿ったリテラシーの教授と補習を理解するには、クラス内での社会文化的な要因に焦点をあてた研究が必要である。

「*The Hangout* は遊びじゃない」: *Sims*のファン・フィクション作品のデザインを目的としたオンライン空間の活用

Jayne C. Lammers  
University of Rochester

若者のデジタル・リテラシーに関する研究の多くは例外的な体験談を扱っており、オンライン空間で各々の文書を公表している一般的な若者に関するものは、ごくわずかである。本稿は、オンライン空間での執筆初心者である書き手を調査し、若者のネットワーク化された執筆活動を形作ることとなった要因の数々を探り、ニュー・ロンドン・グループ(1966)の「意味の設計」という枠組みに言及する。データは*Sims Writers' Hangout*というオンライン上の親和的な空間で2年間に渡り行われた民族誌学的調査の間に収集され、「意味の設計」を通して分析された。情報源は、書き手のウェブサイトへの投稿、それに対する他者の投稿、書き手の*Sims*ファン・フィクション作品、インタビューの回答、研究者の観測手記を含む。調査結果は、ウェブサイト内外でAvailable Designs (入手可能なデザイン)が書き手である彼女の創作をどのように形作り、また彼女が読者の期待に応える作品を創作するためにどのようにオンライン参加を活用したかを明らかにするとともに、書き手の選択に影響を及ぼした数々の要因も示した。この分析結果は親和的なオンライン空間は若者のデジタル・リテラシーの習慣を形作るという理解をより深めることに貢献し、またデザインの概念はその形作りそのものを一層表出させると論ずる。本稿は更に親和的なオンライン空間の読者を協力的な批評者というよりもむしろ共編者と見る複雑な観点も考察する。これらの調査結果は一般的なオンライン空間への参加に関する研究の継続、またクラス内でのネットワーク化された執筆活動に関する新たな調査の必要性を示唆している。

苦悩を強みに書き換えて：高校の詩のクラスの意義に関する若者の回想

*Logan Manning*

*University of Texas San Antonio*

学校という場所が多く、若者の期待に応えられなくなった現在、近年の研究は、詩の朗読の様に関連性があり文芸を土台とした教授法が、教室を新しく意味づけ、学校やその他の機関で軽視された経験のある学生の要求に応えられる可能性があることを示唆している。本稿は落第経験のある都会の若者は高校の詩のクラスで意味があった事柄として一体何を記憶しているのかを回帰的な視点で分析し、教授法と若者の言葉に関する研究に貢献する。この研究では、成人となった参加者にケーススタディとインタビューを通し、詩のクラスでの記憶を呼び起こしてもらい、詩のクラスが、多くの若者にとって転換期となっていたことを明らかにした。詩のコミュニティが、人間関係を育ませ、様々な形をした抑圧やトラウマに対する組織化した沈黙を打ち破る手助けをし、個人としての自己、または地域の一員としての自己の見方を変えるきっかけとなった。リテラシー習得・コミュニティの構造と慣習の中で、参加者は主体的な自己を築き、各々の苦悩を強みに転換したことを記憶している。学校教育全般に対して否定的な体験談を持ち兼ねなかったこのグループの若者達にとって、このクラスとクラス内で培った執筆経験が後にも意味を持ち続けたという事実は、学校における非伝統的なリテラシー教育方法の役割に関する現在の見解を後押しするものである。

リテラシー・アクティビティとしての計測化：グローバルに連結した時代における流動性と教育現場での不均等さ

*Amy Stornaiuolo*

*University of Pennsylvania*

*Robert Jean LeBlanc*

*University of Pennsylvania*

本稿はグローバルに連結した時代の教育者にとって主要な懸念である事柄に言及する：教育現場に見られる根強い不均等さを言及しながら人々、書物、習慣の流動性をどう説明するか。我々自身もこの世界的に不均等な状況に関与している点に注意し、本来、生徒と教師をまとめることを目的としている教育現場でさえ、時間、空間、資料、国籍、ジャンル、言語などの教材が、どのように不均等に配給され、配置されているかを調査する。教育現場の不均等さを調査するにあたって、著者は柔軟性のあるツールとして計測という概念を提案する。運動・流動性とは単に場所の移動では無く、リテラシーと教材は実に様々な空間的、時間的な次元と階層的に関連している。日常のリテラシーの中で、どのような空間や時間（地域、国、世界レベルで）が提供されているのかを明らかにするため、著者は複数の現場で民族誌調査を行い、教師群の異文化協力を計測・分析した。著者は相互のやりとりの中で異なる計測がどのように言及され、意味を持ち、また築かれているかを明白にし、調査参加者は6つの異なる段階--アップスケーリング、ダウンスケーリング、アライニング、コンテストイング、アンカリング、エンベディング--に従事していることを明らかにした。この所見は、リテラシーの習慣や教材の中に刻み込まれている不均等さを表面化させるには、的確な分析ツールを早急に考案する必要があるということを示唆している。リテラシー・アクティビティとしての計測の概念化は、教育的な協力関係における国際的連結性の対話を複雑化し、リテラシー習慣の本質に着目することを示唆している。